

# イタリア民衆教育と「労働者住宅」

—— 20世紀初頭を中心に ——

中嶋佐恵子

## はじめに

19世紀末に生まれたウマニタリア協会はイタリア民衆教育連合の中心を担い、自身の教育活動を展開する一方で、労働運動と密接に結びつき、多様な労働者援護活動を展開した。本稿はその労働者援護活動の一環である「労働者住宅 (case operaie)」<sup>1)</sup> がイタリア民衆教育の理念と実践に与えた影響を考察する。労働者住宅で行われた教育実践としては、民衆大学、民衆図書館、子どもの家、職業学校などがある。

それらのうち、記述されたものが比較的に見られるのは「子どもの家」についてである。「子どもの家」はモンテッソーリ・メソッドを実践する教育施設として設置されており、「子どもの家」とウマニタリア協会との関わりという点では、モンテッソーリの最初の著書『子どもの家の幼児教育に適用された科学的教育学の方法』(“Il Metodo della pedagogia scientifica applicato all’educazione infantile nelle Case dei Bambini”, 1909)<sup>2)</sup> において、ウマニタリア協会の「労働の家」から「子どもの家」に提供される教具についての紹介が見られる<sup>3)</sup>。

ところが前之園幸一郎が指摘するように、この部分は1926年と1950年の版からは削除されている<sup>4)</sup>。1913年の版では、労働の家で生産された教具について付された注において、その教具は「何年前前から『子どもの家』ではもう使用されていない」とされている<sup>5)</sup>。この著書の1950年までの4度にわたる改訂による変更点を検討したジャコモ・チヴェスは、1926年の改訂について、「当時の権力、すなわち初期ファシスト体制の国家権力から拒否されないよう、以前の、より科学的・実証主義的で政治的・改良主義的な強い調子を意図的に弱めているように見える」ことを指摘している<sup>6)</sup>。子どもの家の開設にあたり披露されたフェミニストかつ社会改良主義者の強い調子を伴った祝辞が削除されていることを事例の1つとして挙げている<sup>7)</sup>。

ウマニタリア協会においては、モンテッソーリ・メソッドの普及に熱心であった事務局長アウグスト・オージモが1923年に死去し、その前年に政権をとった

ムッソリーニによるファシズム体制下で活動が縮小され、体制に組み込まれていく。1926年の改訂版の背景にファシズムへ向かう政治情勢の変化があったことは考えられよう。しかし、それが「労働の家」の教具についての記述が削除された理由であるかどうかは明かではない。久しく使用されていないことにより削除されたと考えることもできる。

それから年月を経て、教育学においてウマニタリア協会の「子どもの家」を対象とした研究が現れる。ウマニタリア協会の子どもの家を幼児教育史研究に位置付け、原史料に基づいて丹念に紹介したサンテ・ブッチは、ウマニタリア協会がローマ以外の地で初めての子どもの家を開設し、幼児教育者養成コースを実施したこと等に注目し、モンテッソーリ研究に別の角度から光を当てたため、ウマニタリア協会を研究の対象にしたと述べている<sup>8)</sup>。それ以後もモンテッソーリ研究の一環としてモンテッソーリとウマニタリア協会との関係を掘り下げるイレネ・ポッツィの研究<sup>9)</sup>、教育史においてフェミニズムやウマニタリア協会と関連づけたピローニの研究<sup>10)</sup> などにより、歴史的検討が進められている。

またウマニタリア協会による活動報告書ないし著書として、子どもの家とモンテッソーリ・メソッド幼児教育者養成コースの活動を紹介したもの、労働者住宅についてのもの、労働の家についてのもの、などがあるほか<sup>11)</sup>、イタリア民衆教育連合の機関誌『民衆文化』(“Coltura Popolare”)においてもウマニタリア協会のモンテッソーリ関連の取り組みを紹介する記事などが見られる。住宅建築という視点からの民衆住宅研究における記述も見られる<sup>12)</sup>。

本稿はこれらの研究や報告文書を基に、ウマニタリア協会の労働者住宅・コミュニティの創造から生まれた民衆教育の実践を考察する。これにより、イタリア民衆教育の理念と実践の内実をより深く把握することを目的としている。

## 1. 労働者住宅の構想

19世紀末から20世紀にかけて、ミラノ市はイタリアの工業化の先進地であり、国内随一の工業都市となっていた。この工業都市に各地から労働者が集まり、ミラノ市の人口は1880年の30万5488人から、1890年に40万7332人、1900年に48万1334人、1903年には50万5033人へと増加の一途を辿る<sup>13)</sup>。そしてそれに伴い、低廉な住宅が不足し、労働者の住居の衛生環境や設備が劣悪であることが問題化していた<sup>14)</sup>。

1901年12月、労働者住宅問題の研究のために労働会議所が組織した委員会は、

ミラノ市の労働者住宅を市営にすることを求める報告書を公表した<sup>15)</sup>。その後、ミラノ市に働きかけ、市も検討に入ったが<sup>16)</sup>、紆余曲折を経て、ウマニタリア協会の労働事務所が労働者住宅問題を研究し、その結果をジョヴァンニ・モンテマルティーニが公表することとなった<sup>17)</sup>。労働事務所はミラノ市への移入民が増加する中での住宅の需要と供給についての調査をおこない、1903年3月に報告書<sup>18)</sup>を出版した。

調査においては、例えば、1部屋あたりに居住する労働者数は1890年に1.05人で、1894年までは毎年1人台であるのが、1895年に3.5人となり、それ以後増減を経て1900年には4.3人となったことが示された<sup>19)</sup>。そして調査の結果から、民間の力だけで労働者の住宅問題を解決することは無理であることが明らかになったとされる<sup>20)</sup>。

国のレベルでも対策を講じる動きが出ており、1903年5月31日、法律第254号「民衆住宅について」が成立した。これは促進者の名からルツァッティ法(Legge Luzzatti)と呼ばれる<sup>21)</sup>。ルツァッティ法は、民衆住宅に入居できる人の経済的条件や民衆住宅のための貸付、投資、売買、貸借などについて定めている。

こうした中、ウマニタリア協会は1904年7月22日、民衆住宅の事業に取り組むことを決定し<sup>22)</sup>、投資の額を700の住居に見合う200万里ラとした<sup>23)</sup>。建築家にはジョヴァンニ・ブローイリオ<sup>24)</sup>が選ばれ、1905年2月には見取り図の原案ができている<sup>25)</sup>。

この見取り図では4つの区画があり<sup>26)</sup>、総合サービス部門(servizi generali)の建物が1つと4区画全体の真ん中に保育室がある<sup>27)</sup>。総合サービス部門の建物は次のようである。半地下に<sup>28)</sup>洗濯場があり、2つの入り口からそれぞれ地区専用の所と外部に開放される所に続く<sup>29)</sup>。洗濯場に入る手前に「洗濯場の学校」がある<sup>30)</sup>。地上から2.5メートル高くした1階には、男女それぞれの浴槽・シャワー室がある。2階には図書室、読書室、会議室、授乳・保育室があり、3階には守衛と管理人の住居がある。この建物の1階には一方の端に大衆食堂、もう一方にパン屋が、また食料品店など日用品店もこの階にいくつか開かれる。この建物の正面図には、浴槽、シャワー、洗濯場と並び民衆大学の記載がある<sup>31)</sup>。

住居については、トイレは共同にせず、1部屋の住居であってもトイレ、ガス設備、飲料水の設備、服やじゅうたんを風に当てるための小さなバルコニを備え付ける<sup>32)</sup>。

建物はすべて煉瓦造りで、鉄筋コンクリートか、小梁の間に張るレンガ板(ま

たはタイル)といった不燃性のものが使われる。床はセメントのタイル張りとする<sup>33)</sup>。

## 2. 労働者住宅の展開

### (1) 建設と入居

一つ目の地区(ソーラーリ通り地区)は、ミラノ市南西部に位置する11,000平方メートルの敷地に造られた。1905年4月1日からの1年で11の建物が2区画に分かれて建ち、1906年後半に一方の区画にもう1つの建物が建った<sup>34)</sup>。原案においては4区画の予定だったが、新たな2つ目の地区建設を見込み、2区画に変更された<sup>35)</sup>。総合サービス部門の建物は建てられず、その機能はあとで建ったほうの建物に移され<sup>36)</sup>、そこに会議室、劇場ホール、洗濯場、職業学校が入った<sup>37)</sup>。

1～3室からなる240戸に1,000人以上が入居し<sup>38)</sup>、大部分はミラノ市外からの移入民であった<sup>39)</sup>。1906年3月29日から入居が始まり<sup>40)</sup>、最初の入居者の中にはソーラーリ通りの知人や友人からの呼びかけで来たと思われるロマーニャ地方からの家族が多く見られた。大洪水により家を失った人々である<sup>41)</sup>。

1908年8月後半に2つ目の地区(ロンバルディア大通り地区)の建設が始まる。ミラノ市北東部に位置する。1909年9月上旬に完成し、9月26日には約200家族が入居した<sup>42)</sup>。敷地は10,000平方メートルで3階～4階建ての12の建物が建った<sup>43)</sup>。1つ目の地区の原案で構想されていた総合サービス部門の建物はこの2つ目の地区で実現する<sup>44)</sup>。住居は1部屋～3部屋の214戸があった<sup>45)</sup>。家賃は約22平方メートルの1部屋で年額120リラ、小さなキッチンが40または45リラで、最低120リラ～最高435リラとなった<sup>46)</sup>。

入居者については、1906年10月27日にウマニタリア協会で承認された<sup>47)</sup>労働者住宅運営規程第1条により「得ている収入が法律の規定に該当する工場労働者・職人、店員または事務員に独占的に賃貸する」とこととされ、第2条ではミラノ市に2年以上前から住民登録をし、自身の両親を呼び寄せる者が好ましいとされる<sup>48)</sup>。

1911年のウマニタリア協会の活動報告書によると、ロンバルディア大通り地区の当時の世帯主の職業は、冶金工・電気機械工43人、植字工・石版工36人、事務員・小間使い・郵便配達人32人、大工・仕立て屋・靴職人19人、工場労働者18人、左官・セメント塗り・ペンキ塗り17人、道路清掃夫・御者・荷物運搬人17人、教師・助産師・小企業従業員<sup>49)</sup>12人のほか、労働者住宅の職員やサー

ビス従事者、労働者住宅の大衆食堂や食料品などの小売店を営業する協同組合の従事者となっていた<sup>50)</sup>。

また1911年1月時点のロンバルディア大通り地区214世帯の1045人の年齢・性別構成は以下のようになっていた。

|          | 男性（人） | 女性（人） |
|----------|-------|-------|
| 12歳まで    | 174   | 161   |
| 13歳から20歳 | 77    | 94    |
| 21歳から40歳 | 194   | 178   |
| 41歳から60歳 | 76    | 56    |
| 61歳から80歳 | 29    | 19    |
| 計        | 538   | 507   |

(Salvatore Sapienza, 1911. *L'andamento del quartiere*, 6 marzo 1911, in Colombo e altri (a cura di), *Aria di Umanitaria alle Rottole*, Raccolto Edizioni, 2009, p.108.)

## (2) 運営

2つの労働者地区の運営は1922年まではウマニタリア協会の直営である。1922年8月からロンバルディア大通り地区の、1924年3月からはソラーリ通り地区の運営はそれぞれの地区の賃借人協同組合（Cooperative Inquilini）に替わるが、1931年からファシスト化したウマニタリア協会の直営になる。第2次大戦後、2つの賃借人協同組合が再建されたが、地区の経営維持が困難となり<sup>51)</sup>、最終的には1983年7月9日のミラノ市の決定をもってミラノ市営となる<sup>52)</sup>。

当初の運営については、先に述べた労働者住宅運営規程に定められる。運営はウマニタリア協会の第1部門が担当し（第8条）、協力団体として監視委員会（Commissione di Vigilanza）と称する諮問委員会（Commissione Consultivo）が組織される<sup>53)</sup>。構成員は、①世帯主から1年ごとに選出される賃借人2名、②ウマニタリア協会の労働会議（Consiglio del Lavoro）の代表1名、③女性連合の代表1名、④労働会議所の代表1名、⑤市の地区担当医1名、⑥関連する他団体から要求があれば、ウマニタリア協会の判断によりその団体の代表1名、となっていた。委員会は、衛生基準が遵守されているかどうか監視するほか、必要な場合は慈善団体により賃借人を助け、福祉や教育などの事業により賃借人を導く<sup>54)</sup>。

また賃借人協会（Associazione fra gli Inquilini）が生まれ、娯楽や慈善事業を促進する<sup>55)</sup>。この組織は、ソラーリ通り地区において夜に市電を降りてから1

人で帰宅することを恐れる住人のために結成された、家まで付き添う「お助け隊」が契機となって生まれた<sup>56)</sup>。

### (3) 民衆大学・民衆図書館・職業学校・レクリエーション・学童保育

両地区には、それぞれ民衆大学、民衆図書館、職業学校 (Scuole Preparatorie Operaie、直訳すると労働準備学校)、ポッチャ競技場<sup>57)</sup> があり、楽団や演劇愛好会が活動していた<sup>58)</sup>。

ソラーリ通り地区では賃借人協会が民衆図書館部門と民衆大学部門を立ち上げ、劇場のホールでは民衆大学が多数の講演会を催したという<sup>59)</sup>。

ロンバルディア大通り地区での民衆大学の開催状況を拾うと、1911年には「ダーウィン主義」をテーマに8回の講義があり<sup>60)</sup>、1回あたり平均の参加者数は約200人であった<sup>61)</sup>。1914年2月には「国家の収入と支出」をテーマにした講義が7回開催され、1回あたり平均の参加者数は50人であった。3月には「ダンテ、ボッカッチョと1300年代の他の作家たち」をテーマに8回開催されたが、参加者数は不明である<sup>62)</sup>。

職業学校については、ソラーリ通り地区には遅くとも1906年11月にはあり<sup>63)</sup>、協同組合・社会保障・社会立法の学校<sup>64)</sup> と女子職業学校についての記述が見られる。後者には刺繍、アイロンかけ、裁縫、白布地製品の仕立て、事務員・店員のコースがあった<sup>65)</sup>。ロンバルディア大通り地区では家政学を内容とする女性向けのコースが開かれている<sup>66)</sup>。

レクリエーション活動については、ソラーリ通り地区賃借人協会は「世俗アントニオ・シエーザ・レクリエーション・クラブ」(Ricreatorio Laico Antonio Sciesa)の支部を設立し、約60人の子ども・若者の加入があった<sup>67)</sup>。演劇愛好会とそれに属する合唱団、さらにオーケストラも生まれる<sup>68)</sup>。吹奏楽団もでき<sup>69)</sup>、メンバーのほとんどは11歳から14歳の子どもたちであった<sup>70)</sup>。ポッチャ愛好会<sup>71)</sup>、ソラーリ登山家協会もできる<sup>72)</sup>。ロンバルディア大通り地区では1914年、賃借人協会がチマローザ合唱団と共同で、また「世俗ガリバルディ・レクリエーション・クラブ」との共同でダンス・パーティーを開いている<sup>73)</sup>。

休日の学童保育も両地区で取り組まれている<sup>74)</sup>。ロンバルディア大通り地区では、1910年、シエーザ・レクリエーションクラブにより、夏休み中、9月末までの間、地区の体育館で少年少女を対象とした学校が開かれた。教師は小学校教師男女1名ずつの2名である。実施時間は毎日9時から12時と15時から18時までである。要望に応じて翌年も開催されている<sup>75)</sup>。ソラーリ通り地区でも夏休み中の課外学習が取り組まれた<sup>76)</sup>。

また夏休み中、ウマニタリア協会が所有する「休暇の家」(Casa di Vacanza)に、両地区の子どもたちが招待された<sup>77)</sup>。

#### (4) 子どもの家

1908年、ソラーリ通り地区にモンテッソーリ・メソッドを実践する「子どもの家」が開設される。10月18日、モンテッソーリも出席して落成式が行われた<sup>78)</sup>。責任者はモンテッソーリの意向で彼女のローマ大学の門下生であり、ローマのサン・ロレンツォ地区の子どもで活動経験のあるアンナ・マッケローニが務める<sup>79)</sup>。対象は3歳から6歳の子どもである。着替え部屋、教具を備えた作業室、音楽とレクレーションの部屋、昼の給食とおやつホットミルクを準備する台所、付属の医務室を含む管理運営室を備える<sup>80)</sup>。子どもの家に所属の医者が毎週訪問する。料金は、余裕のある家のみ月に2～3リラと決められていたが、実際には払うものはなかった<sup>81)</sup>。

1909年11月21日には、ロンバルディア大通り地区にも子どもの家が開設され、アンナ・フェデーリ、マリア・サングイーニ、ほかにモンテッソーリの協力者たちにより運営されることとなった<sup>82)</sup>。120人以上の収容が可能である<sup>83)</sup>。

子どもの家への登録・出席状況をみると、1914年2、3月では以下のようである。

|         | ソラーリ通り地区   |                      | ロンバルディア大通り地区 |                      |
|---------|------------|----------------------|--------------|----------------------|
|         | 登録者<br>(人) | 1日当たりの平均の<br>出席者 (人) | 登録者<br>(人)   | 1日当たりの平均の<br>出席者 (人) |
| 1914年2月 | 94         | 70                   | 55           | 40                   |
| 1914年3月 | 94         | 65                   | 60           | 55                   |

(Colombo e Andréola, *Una città nella città*, in Colombo e altri (a cura di), *Aria di Umanitaria alle Rottole*, Raccolto Edizioni, 2009, p.50.)

この2地区の子どもの家は1922年からミラノ市立となった<sup>84)</sup>。

#### (5) 保健・医療・福祉

##### ①保育所

労働者住宅の構想段階から計画された保育所は、のちに開設される子どもの家の一部となる<sup>85)</sup>。その保育所の目的は、次のように定められていた。

ア) 地区の母親が自身の子どもの授乳・子育てをするのを助ける。

イ) 可能な限り、人工乳の代わりに母乳で授乳することを助ける。



- ウ) 入所者には滅菌した良質の牛乳を提供し、子どもや病人のために家で必要とする者にはそれを安価で販売する。
- エ) 担当医を通し、子どもの衛生の基礎知識を普及しながら、母親に子育てについて助言を与える。
- オ) 地区の子どもに定期的な往診を受けさせる。
- カ) 保育士の実践をする学校を始める。
- キ) 保育士の職業斡旋所を代替する。<sup>86)</sup>

子どもの保育には、乳児4人につき1人、6人の非乳児につき1人の特別な保育士があたり<sup>87)</sup>、保健衛生面の監督は医者に委ねられる<sup>88)</sup>。開所時間は、冬季は日曜祝日以外の7時から19時、夏季は日曜祝日以外の6時から20時である<sup>89)</sup>。経費には、施設・設備、人件費のほか、子どもの衣類、おむつ、よだれかけ、手拭いなども計上されていた<sup>90)</sup>。

## ②保健・衛生

両地区とも地区担当医がおり<sup>91)</sup>、監視委員会に地区担当医が参加することになっていた。監視委員会は各住居を最低月1回訪問し、衛生や清掃の規範が遵守されているかどうかを監視する任務があった<sup>92)</sup>が、遂行されないことが度々あったようである<sup>93)</sup>。

## ③薬局

ソラーリ通り地区にはザバッテリー薬局があり、経営者ザバッテリーは困窮者のために可能な限り安価で薬を提供した。彼は賃借人協会の指導者の一人であり、地区で数少ない知識人の一人でもあった。この薬局に集った人々から様々な活動が生まれたという<sup>94)</sup>。

# 3. 民衆教育と労働者住宅

## (1) イタリア民衆図書館連盟結成大会におけるルッツァッティ報告

1906年9月15日－17日、ミラノで第1回国際民衆教育事業大会が開催され、小学校補助・補完事業、職業教育、成人を対象とした民衆文化機関がテーマとされた。この大会の決議を受けて、1908年12月8日、イタリア民衆教育連合第1回大会が、これに合わせ第1回全国民衆図書館大会（12月6日－10日）が、いずれもローマで開催された。前者はイタリア民衆教育連合の、後者はイタリア民衆図書館連盟の結成大会となった。この全国民衆図書館大会において「民



衆住宅と民衆図書館」と題する報告があった。報告者はルイージ・ルツァッティである。ルツァッティは先に述べた1903年の民衆住宅法（ルツァッティ法）の法案提案者でもあり、民衆図書館促進協会（Società Promotrice delle Biblioteche Popolari）の創立（1867年）にも関わっていた<sup>95)</sup>。

ルツァッティは、イタリアの教育や福祉の遅れの原因として、学校が孤立し、学校を補助する他のすべての機関に囲まれていないことを挙げ、民衆学校と民衆図書館、さらに民衆図書館と民衆の支えとなるべきあらゆる機関を調整することを考える<sup>96)</sup>。この発想から民衆図書館を民衆住宅に結びつけることを提案する。これを受けて大会は、ミラノ市、公的機関、協同組合団体、その他の民衆住宅を建設する業者団体が、この大会で結成されるイタリア民衆図書館連盟と連携して社会的共同生活の新しいセンターに民衆図書館を設置するように求める決議をあげた。また、民衆住宅を支持する人々に、この点について民衆図書館と民衆住宅と民衆学校の間に合意があることを示すという提案も受け入れられた<sup>97)</sup>。民衆図書館には、教育と福祉の視野から、学校と住民の生活基盤を結ぶための結び目としての機能が見出されていたと言える。

また、この大会において国際民衆大学連盟会長フランチェスコ・ブッレと大会実行委員長フィリッポ・トゥラーティが、民衆図書館と民衆大学の協力関係について言及している<sup>98)</sup>。実際に、民衆大学は1903年に成立したミラノ民衆図書館共同事業体に加盟し、翌年、共同事業体により新設された4つの民衆図書館のうち1つは民衆大学内に置かれ、中央図書館の役割を担っている<sup>99)</sup>。

民衆大学と密接な協力関係にある民衆図書館と民衆住宅とを連結させて、イタリアの教育と福祉の発展を見通すという発想が、ウマニタリア協会の労働者住宅の初期の時代に、民衆教育分野の全国大会で合意を得ていたのである。

## (2) ウマニタリア協会とモンテッソーリ

ウマニタリア協会とモンテッソーリとの関係は、1908年5月まで遡るといわれる。ミラノを中心に活動していた全国女性連合による全国女性実際行動大会（Congresso Nazionale di Attività Pratica Femminile）（5月24日－28日）である<sup>100)</sup>。5月26日、モンテッソーリは前年にローマのサン・ロレンツォ地区に創設された子どもの家について発表を行った<sup>101)</sup>。この最初の子どもの家が称賛を博していた頃であり、モンテッソーリの発表は大いなる熱意をもって受け入れられたという<sup>102)</sup>。

この発表を聴いたリンダ・マルナーティ<sup>103)</sup>は、モンテッソーリの発表を特に高く評価し<sup>104)</sup>、モンテッソーリにこの内容をミラノ市の学校関係者・市民に

も聞かせるよう依頼した<sup>105)</sup>。選ばれたのはウマニタリア協会の本部である<sup>106)</sup>。そしてその時の聴衆の多くは、生まれたばかりのソラーリ通り労働者住宅に住む教師や家族だったのである<sup>107)</sup>。

モンテッソーリと女性連合との協力関係は、この連合がミラノで創立された1899年の春から始まるとされる。モンテッソーリが知的障害児保護同盟 (Lega per la protezione dei bambini deficienti) の活動のため、最初の会議をミラノで開いた時である<sup>108)</sup>。

また女性連合とウマニタリア協会の協力関係は、ウマニタリア協会が活動を始めた頃から見られ、数多の共同事業が行なわれている<sup>109)</sup>。個人的な関係では、女性連合会長エルシーリア・マイノの夫であるルイージ・マイノは創設当初のウマニタリア協会の会長であり、それ以後もウマニタリア協会の要職についている。

こうして、1908年7月1日、ウマニタリア協会の評議会はソラーリ通りの労働者住宅にミラノで最初の子どもの家を設置することを決めた。当時、親たちは仕事に出かけるか、仕事を探しに出かけ、子どもらは郊外の路上に練り出している、という状況であった<sup>110)</sup>。

子どもの家の運営には、モンテッソーリ・メソッドを習得し、それを実践できる教員が不可欠である。ウマニタリア協会は子どもの家の設置に必要な幼児教育者養成に取り組むこととなる。1911年10月16日から12月7日まで、モンテッソーリ教員養成講座 (Corso Magistrale Montessori) がソラーリ通りの子どもの家で開設された。講座は日曜祝日以外の毎日、9時から12時までと14時から18時まで開かれ、モンテッソーリが委員長を務める委員会により修了試験が行われる<sup>111)</sup>。

1914年には、モンテッソーリの提案により<sup>112)</sup> ウマニタリア協会は同年の11月から翌年7月まで<sup>113)</sup>、のちに「幼児教育者のための師範学校」(Scuola Magistrale per educatrici d'infanzia) と呼ばれるモンテッソーリ・メソッドの幼児教育者を養成するコースを開いた。12月9日にはモンテッソーリの出席で開会式が行なわれた<sup>114)</sup>。

コースは幼児教育者と小学校教師を対象としており<sup>115)</sup>、公教育省とミラノ市からの財政援助を受ける。1915年6月26、27、28日に夏季試験が行われ、筆記、口頭、実践科目、デッサンの試験が行われた。試験委員会は当時のミラノ県教育委員会の長ルイージ・フリーズが委員長となり、公教育省アドバイザー、幼稚園視学官、小学校視学官、師範学校校長、小学校校長、ウマニタリア協会会長、画家、モンテッソーリ学校教員などからなっていた。試験科目は、「メソッ

ド」、「心理学」、「生理学と人類学」、「観察実習講座」、「体育」、「デッサン」からなり、「メソッド」はモンテッソーリとアンナ・フェデーリが担当した。不合格者は10月の秋季試験を受験する<sup>116)</sup>。校長・助手それぞれの部門を合わせた在籍者49名のうち24名が受験し16名がすべての科目に合格した<sup>117)</sup>。

コースには教育実習が含まれており、ウマニタリア協会はこの実習のため、ウマニタリア協会本部に3つ目の子どもの家を開設した<sup>118)</sup>。コース受講生はウマニタリア協会本部の子どものか、またはモンテッソーリ・メソッドの実験をしている小学校1年生のクラスで教育実習を行う<sup>119)</sup>。

1915年1月から、ウマニタリア協会は小学校1、2年生（prime due classi elementari）についてもモンテッソーリ・メソッドの実験を行うことにした。ウマニタリア協会のモンテッソーリ教員養成講座を修了したミラノ市立学校の教員マリア・ソラーリが責任者としてミラノ市から任命された。登録者は18人で、貧困家庭や家庭環境に問題を抱えている子どもが多かった<sup>120)</sup>。実験は翌年も続けられる<sup>121)</sup>。

労働者住宅の子どものかを契機とし、教員養成コースとそのコースにおける教育実習のための子どものかの新設へとつながった。

1920年7月14日、モンテッソーリがバルセロナからオージモに手紙を出し、労働（作業）を通した教育について「中等学校のクラスと青年期の教育においてモンテッソーリ・メソッドを継続する必要がある」とし、「子どもの家と小学校コースの良いモデルを提供し普及させる必要がある。実験的に中等学校の新しい形を練りながら、またその中で労働者の教育も練りながら、若者のためのメソッドを継続する必要がある」と書いた<sup>122)</sup>。モンテッソーリ・メソッド普及の構想は教育全体に広がっていた。

### (3) 子どもの家と労働の家

労働者住宅の子どものかは、モンテッソーリ・メソッドの教具の調達という点でウマニタリア協会の労働者援護事業によって支えられていた。「労働の家」(Casa di Lavoro) の生産活動である。

労働の家は失業者に労働を提供する施設で、1907年8月7日から活動を始める<sup>123)</sup>。創設時からアレッサンドリーナ・ラヴィッツァが施設長を務めている。ラヴィッツァは労働の家で働く以前から、女性・児童の保護、困窮者・病人の支援をしていた。困窮者の病人のためのキッチン (Cucina per ammalati poveri) 設立 (1879年)<sup>124)</sup>、慈善的協同組合商店 (Magazzino Cooperativo Benefico) 設立 (1887年)<sup>125)</sup>、「身を持ち崩した女性と病気の子どものための」

実験室学校 (Scuola laboratorio 《per le perdute e bambini infetti》) 開設 (1904年)<sup>126)</sup>、などがある。教育分野においては、女子職業学校設立 (1870年)<sup>127)</sup>、ミラノ民衆大学創立 (1901年) にも携わった<sup>128)</sup>。

労働の家には①紙製品加工部門、②衣服仕立て部門、③木工・おもちゃ部門、④筆写・タイプ部門、の4部門があり、モンテッソーリ・メソッドの教具を制作するのは、③の部門であった。マリア・ヘレナ・ポリドーロによれば、特許を得たモンテッソーリ教具のセットの組織的な大量生産が最初に始まるのはこの労働の家であるという。はじめはウマニタリア協会の子どもの家のために、その後は国内外の保育所や類似の機関に販売するためにも生産される。販売先のリストには、ロンドン、ブリュッセル、パルセロナなどもあった<sup>129)</sup>。1908年11月の時点で、労働の家はローマのサン・ロレンツォ地区の子どもの家のための教具の生産をはじめ、売り上げの20%を占めていたという<sup>130)</sup>。

ウマニタリア協会の子どもの家開設から1か月後、モンテッソーリはオージモに教具の不完全さについて手紙で苦情を述べている<sup>131)</sup>。ポッツィは、労働の家とウマニタリア協会なしではモンテッソーリ・メソッドの応用も普及もそれほど大きな規模でできなかっただろうと述べるが<sup>132)</sup>、労働の家で生産された教具がいつまで使用されたのか、生産がいつまでされたのかわかっていない。しかし短期間であれ、教具の提供という点で労働の家と子どもの家は相互に補い合っていたと言えるであろう。

## おわりに

本稿で取り上げた2つの労働者住宅においては、子どもの家、民衆図書館、民衆大学、職業学校といったイタリア民衆教育の主たる柱をなす活動が位置づけられ、教育と福祉を一体化した取り組みの中で民衆教育が展開していた。ウマニタリア協会は、公的慈善団体として成立し、生活支援と労働、教育を通して「恵まれない人々」の自立を図ることを目的としている (規約第2条)。教育と生活支援を統合的に見通す視野と実践は、組織創設の目的に由来するものである。この組織の活動として生まれた労働者住宅は、教育と福祉を統合的に実践する実験場であり、同時期に民衆図書館運動において生まれていた民衆住宅と民衆図書館、民衆大学を連結させるという発想を体現するものでもあった。

教育と福祉を統合的に捉える民衆教育の発想はすでに1906年の国際民衆教育事業大会において見られる。しかし、本稿で取り上げた実践は、さらに民衆教育を労働者住宅に結びつけることにより、生活基盤となる住宅・コミュニティ

の創造と教育・福祉を一体的に視野に入れるという点で、イタリア民衆教育の理念と内実をより豊かにする試みの例証であると言ってよからう。

# 注

- 1) 一般的には「民衆住宅 (case popolari)」の用語が用いられていたが、ウマニタリア協会の取り組みについては、ウマニタリア協会自身が呼称している「労働者住宅」を用いている。
- 2) 4度めの改訂版である1950年版からタイトルが『子どもの発見』となる。
- 3) 'I giocattoli Ravizza, i solidi geometrici e le impronte' の見出しのある一節となっている。
- 4) 前之園幸一郎「モンテッソーリ教育思想の展開とチッタ・ディ・カステッロ」『青山学院女子短期大学紀要』55, p.22の注25。
- 5) Istituto Superiore di Ricerca e Formazione dell'Opera Nazionale Montessori, *Maria Montessori. Il Metodo della pedagogia scientifica applicato all'educazione infantile nelle Case dei Bambini. Edizione critica*, Edizione Opera Nazionale Montessori, 2000, p.474.
- 6) Giacomo Cives, *Carattere e senso delle varianti di Il Metodo*, in *ivi*, p.XXV.
- 7) *ivi*, p.XXVI.
- 8) Sante Bucci, *Educazione dell'infanzia e pedagogia scientifica. Da Froebel a Montessori*, Bulzoni Editore, 1990, p.160.
- 9) Irene Pozzi, *La Società Umanitaria e la diffusione del Metodo Montessori (1908-1923)*, in "Ricerche di Pedagogia e Didattica" 10, 2 (2015) がある。
- 10) Tiziana Pironi, *Femminismo ed educazione in età giolittiana. Conflitti e sfide della modernità*, Edizioni ETS, 2010. Tiziana Pironi, *Maria Montessori e gli ambienti milanesi dell'Unione Femminile e della Società Umanitaria*, in "Annali di storia dell'educazione", 2018. などがある。
- 11) Società Umanitaria, *L'Umanitaria e la sua opera*, 1922. Claudio A. Colombo e Marina Beretta Dragoni (a cura di), *Maria Montessori e il sodalizio con l'Umanitaria. Dalla Casa dei Bambini di via Solari ai corsi per insegnanti (1908-2008)*, Raccolto Edizioni, 2008. Archivio Storico della Società Umanitaria (a cura di), *Quando l'Umanitaria era in via Solari. 1906. Il primo quartiere operaio*, Raccolto Edizioni, 2006. Claudio A. Colombo e altri (a cura di), *Aria di Umanitaria alle Rottole. 1909. Nasce il secondo quartiere operaio*, Raccolto Edizioni, 2009. Società Umanitaria, *Casa di Lavoro*, 1908. など多数見られる。
- 12) Marco Lucchini, *La casa popolare a Milano. Social Housing in Milan*, Arquitectura Publicaciones Universidad de Alicante, 2020. は、1908年に創設されたミラノ民衆・低廉住宅独立機関 (Istituto Autonomo Case Popolari ed Economico di Milano) 以外による、それ以前の民衆住宅の中では、ウマニタリア協会によるものが全体の構造設計において特に進んでいると評価している (p.14)。

- 13) ミラノ市の HP における統計 Popolazione residente, in <https://www.comune.milano.it/documents/20126/34822708/Popolazione+Residente.pdf/6c49a26c-b0b9-c07c-6226-6b414a263232?t=1568965335022>, 2023年12月16日閲覧。
- 14) Claudeo.A.Colombo, *Il quartiere di via Solari: Un modello per le abitazioni operaie di Milano*, in Archivio Storico della Società Umanitaria (a cura di), *op.cit.*, p.12.
- 15) Giovanni Montemartini, *La questione delle case operaie in Milano. Indagini statistiche con 14 tabelle e 3 diagrammi*, Ufficio del Lavoro della Società Umanitaria, 1903 in Mario Arduino e altri (a cura di), *Un'esperienza riformista. Le case operaie della Società Umanitaria in Milano*, CREA, 1983, p.44.
- 16) *ibidem*.
- 17) Montemartini, *op.cit.*, p.46.
- 18) Montemartini, *op.cit.*. Arduino e altri (a cura di), *op.cit.* に再録されている。
- 19) Montemartini, *op.cit.*, p.69. 表13. この表では、一方で中産階級の1部屋あたりの居住者数は1890年から1901年まで1人未満となっているのがわかる。
- 20) *ivi*, p.73.
- 21) Colombo, *op.cit.*, p.14.
- 22) Claudio A. Colombo e Marco Andréula, *Una città nella città.: Il quartiere di viale Lombardia e il suo modello di housing sociale*, in Colombo e altri (a cura di), *op.cit.*, p. 18.
- 23) Colombo, *op.cit.*, p.9.
- 24) ミラノ市の40以上の地区の民衆住宅建築に携わり、1913年から1934年までミラノ民衆住宅独立機関の技術事務所の所長を務めた。Colombo, *op.cit.*, p.17.
- 25) Colombo, *op.cit.*, pp.14-15.
- 26) *ivi*, p.15.
- 27) *ivi*, pp.20-21.
- 28) 原案では記載がないが、出来上がった建物と他の建物の位置から推察できる。
- 29) Colombo, *op.cit.*, p.21.
- 30) *ivi*, p.20. 下の 'servizi generali' の図面。
- 31) *ivi*, p.21.
- 32) *ivi*, p.20.
- 33) *ivi*, p.21.
- 34) *ivi*, p.19.
- 35) *ivi*, pp.18-19.
- 36) *ivi*, p.15.
- 37) *ivi*, p.19.
- 38) *ibidem*.
- 39) Colombo e Andréula, *op.cit.*, p.22.
- 40) Società Umanitaria, *L'opera della Società Umanitaria. Dalla sua fondazione ad oggi*, 1° Maggio 1911, p.117.

- 41) Colombo, *op.cit.*, p.22.
- 42) Colombo e Andréula, *op.cit.*, p.22.
- 43) Società Umanitaria, *L'opera della Società Umanitaria*, p.119.
- 44) Colombo, *op.cit.*, p.18.
- 45) Società Umanitaria, *L'opera della Società Umanitaria*, p.120.
- 46) *ivi*, p.121.
- 47) Verbale di seduta del giorno 27 ottobre 1906, in Arduino e altri (a cura di), *op.cit.*, p.94.
- 48) Società Umanitaria, Norme per l'amministrazione delle case operaie, in Arduino e altri (a cura di), *op.cit.*, p.90. 規程が pp.90-92 に収録されている。
- 49) piccoli impiegati とあり、年少者の可能性がある。
- 50) Società Umanitaria, *L'opera della Società Umanitaria*, p.122.
- 51) Colombo, *op.cit.*, p.47.
- 52) Colombo e Andréula, *op.cit.*, p.96.
- 53) Società Umanitaria Milano, *La Società Umanitaria. Fondazione P. M. Loria Milano. 1893/1963*, p.27. に転載されている資料の p.8。
- 54) Società Umanitaria, Norme per l'amministrazione delle case operaie, p.91.
- 55) Società Umanitaria, *L'opera della Società Umanitaria*, p.117.
- 56) A.Bernacchi e altri (a cura di), *Cinquantenario della Casa Umanitaria di via Solari 40*, pp.5-6.
- 57) ボッチャはボーリングに似た屋外ゲーム。
- 58) Colombo, *op.cit.*, pp.28-29.
- 59) Bernacchi e altri (a cura di), *op.cit.*, p.6.
- 60) Colombo e Andréula, *op.cit.*, pp.44-45.
- 61) Salvatore Sapienza, 1911. *L'andamento del quartiere*, 1911, in Colombo e altri (a cura di), *op.cit.*, p.109.
- 62) Colombo e Andréula, *op.cit.*, p.50.
- 63) Protocollo della Società Umanitaria 7 nov. 1906 Al N. 195. in Arduino e altri (a cura di), *op.cit.*, p.132.
- 64) Colombo, *op.cit.*, p.46.
- 65) *ivi*, p.31.
- 66) Colombo e Andréula, *op.cit.*, p.45.
- 67) Bernacchi e altri (a cura di), *op.cit.*, p.7.
- 68) *ivi*, p.6.
- 69) 「楽団 Corpo Musicale」は写真から吹奏楽団と考えられる。Archivio Storico della Società Umanitaria (a cura di), *op.cit.*, p.55.
- 70) Bernacchi e altri (a cura di), *op.cit.*, p.7.
- 71) Colombo, *op.cit.*, p.29.
- 72) Bernacchi e altri (a cura di), *op.cit.*, p.21.
- 73) Colombo e Andréula, *op.cit.*, p.50.



- 74) Colombo, *op.cit.*, pp.28-29.
- 75) Colombo e Andréula, *op.cit.*, p.47.
- 76) Colombo, *op.cit.*, p.31.
- 77) Colombo e Andréula, *op.cit.*, pp.47-48.
- 78) Claudio A. Colombo, *Dalla parte dei bambini: Vent'anni di attività per l'infanzia insieme a Maria Montessori*, in Colombo e Beretta Dragoni (a cura di), *op.cit.*, p.19.
- 79) Tiziana Pironi, *Femminismo ed educazione*, pp.138-139.
- 80) Colombo, *op.cit.*, p.19.
- 81) 少なくともファシズムの到来までのことである。Colombo, *op.cit.*, p.20.
- 82) Colombo, *Dalla parte dei bambini*, p.32.
- 83) Società Umanitaria, *L'opera della Società Umanitaria*, p.123.
- 84) Colombo, *op.cit.*, p.26.
- 85) *ivi*, p.21. 注の部分。
- 86) Statuto Art.1 in Arduino e altri (a cura di), *op.cit.*, p.121.
- 87) Regolamento interno A) Personale di sorveglianza Art.3, in *ivi*, p.122.
- 88) Regolamento interno A) Personale di sorveglianza Art.1, in *ibidem*.
- 89) Regolamento interno B) Accettazione dei bambini Art.4, in *ibidem*.
- 90) Arduino e altri (a cura di), *op.cit.*, p.125.
- 91) Colombo, *op.cit.*, p.28.
- 92) *ivi*, p.26.
- 93) *ivi*, p.36.
- 94) Bernacchi e altri (a cura di), *op.cit.*, p.8.
- 95) Federazione Italiana delle Biblioteche Popolari, *Le biblioteche popolari al Congresso Nazionale (Roma, 6-10 dicembre 1908)*, 1910, p.30. ミラノ民衆銀行の創設者であり、財務大臣、農業・工業・商業大臣、1910年からは総理大臣を務めるなど政治・経済界での活躍が広く知られている。
- 96) 拙稿「イタリアにおける民衆図書館の組織化と民衆教育」姫路獨協大学教職課程『教職課程研究』第31集、2020年、p.101。Federazione Italiana delle Biblioteche Popolari, *op.cit.*, p.32. を基にしている。
- 97) 同論文同ページ。*ivi*, p.33. を基にしている。
- 98) 同上。
- 99) 同論文、p.96。Ettore Fabietti, *Il primo venticinquennio delle biblioteche popolari milanesi*, in “Nuova Antologia”, (1 ottobre 1928), p.21. を基にしている。
- 100) Colombo, *Dalla parte dei bambini*, p.14.
- 101) Pironi, *Femminismo ed educazione*, p.76.
- 102) *ivi*, p.125.
- 103) 「女性の利益擁護同盟」(Lega per la tutela degli interessi femminili) の会長であり、1894年から1898年までウマニタリア協会の評議会のメンバーであった。
- 104) Pironi, *Maria Montessori e gli ambienti milanesi*, p.10.

- 105) Pironi, *Femminismo ed educazione*, p.126.
- 106) *ivi*, p.129.
- 107) *ivi*, p.127.
- 108) Pironi, *Maria Montessori e gli ambienti milanesi*, p.9.
- 109) Pironi, *Femminismo ed educazione*, p.129 など。
- 110) Colombo, *Dalla parte dei bambini*, pp.16-17.
- 111) Sante Bucci, *op.cit.*, p.172.
- 112) *ivi*, p.174.
- 113) Colombo, *Dalla parte dei bambini*, p.43.
- 114) *ivi*, p.42.
- 115) *Il Corso di preparazione delle educatrici secondo il Metodo Montessori istituito dalla Società Umanitaria*, in “Coltura Popolare”, 1915, p.661.
- 116) *Il Corso di preparazione delle educatrici*, pp.660-663.
- 117) Società Umanitaria, *L’Umanitaria e la sua opera*, p.262.
- 118) *ivi*, p.247.
- 119) Colombo, *Dalla parte dei bambini*, p.43.
- 120) Lina Olivero, *L’esperimento della prima classe elementare con il metodo Montessori fatto dalla Società Umanitaria*, in “Coltura Popolare”, 1916, p.64.
- 121) Maria Solari, *Un secondo anno di esperimento del Metodo Montessori nelle classi elementari presso la Soc. Umanitaria*, in “Coltura Popolare”, 1916, p.632.
- 122) Colombo, *op.cit.*, p.29.
- 123) Emma Scaramuzza, *Una filantropa di professione Alessandrina Ravizza. La collaborazione con la Società Umanitaria*, in “Storia in Lombardia”, p.79.
- 124) *ivi*, p.50.
- 125) *ivi*, p.54.
- 126) *ivi*, p.64.
- 127) Paola Signorino, *Odiava il dolore e chi lo permetteva. Alessandrina Ravizza a Milano*, in Guiliana Nuvoli e Claudio A. Colombo (a cura di), *La signora dei disperati*, Raccolto Edizioni, 2015, p.21.
- 128) Scaramuzza, *op.cit.*, p.57.
- 129) Maria Helena Polidoro, *Quando si produceva il materiale Montessori*, in Nuvoli e Colombo (a cura di), *op.cit.*, p.214.
- 130) Lettera del segretario economico alla Montessori (4, novembre 1908) in Association Internationale Montessori, 2894/5, in Pironi, *Femminismo ed educazione*, p.137.
- 131) Pironi, *Femminismo ed educazione*, p.141.
- 132) Pozzi, *op.cit.*, p.104.